

シンポジウム（公募）

「胆膵疾患診療の進歩」

司会 増田 充弘（神戸大学 消化器内科）

山下 泰伸（和歌山県立医科大学 第二内科）

膵・胆道癌は予後不良例が多く、早期診断が課題である。新規バイオマーカーの開発や超音波、CT、MRI、PET-CT などの画像診断技術の進歩による早期診断への取り組みが行われている。良性疾患においても、エラストグラフィによる組織硬度計測、超音波を用いた粘弾性測定や微小血管イメージングの改良により膵実質評価が可能となり、慢性膵炎などの線維化や炎症の評価に活用され始めている。また、治療においては ERCP 関連手技や Interventional EUS の目覚ましい発展により、胆膵治療の重要性が高まっている。ERCP 関連手技に関しては、最新式の細径胆道鏡やバルーン内視鏡の開発により治療の幅が広がっている。また、Interventional EUS においては、LAMS を用いた WON に対するネクロセクトミー、胆道狭窄に対する EUS-BD が普及しつつあり、治療困難例の対応が可能となってきている。本セッションではさまざまな胆膵疾患における最新の診療や手技の工夫に関しての取り組みや限界、今後の展望について様々な切り口から幅広く演題を募集する。

シンポジウム（公募）

「炎症性腸疾患診療の進歩」

司会 馬場 重樹（滋賀医科大学医学部附属病院 光学医療診療部）

本澤 有介（関西医科大学 内科学第三講座）

今炎症性腸疾患領域における治療、モニタリングは近年、大きく進歩を遂げている。特に治療薬では抗 TNF- α 抗体製剤が登場して約 20 年が経過し、さらに近年では様々な新規治療薬が登場している。しかしながら、抗 TNF- α 抗体製剤、接着因子阻害剤、抗 IL-12/23p40 製剤、JAK 阻害剤などの治療選択は未だ定まっておらず、さらに重症例に対する薬剤選択肢も限られているのが現状である。また、5-ASA 製剤や局所製剤などの基本治療は非常に重要であり、これら薬剤の使用工夫についても議論が必要と思われる。モニタリングに関しては便中カルプロテクチンや LRG などのモニタリングツールの使用だけでなく、特殊光を用いた内視鏡観察も可能となっている。また、クローン病の複雑痔瘻に用いる再生医療製品や短腸症候群をターゲットとした GLP-2 アナログ製剤など特殊なシチュエーションへの対応も試みられている。これら現状を踏まえ本シンポジウムでは炎症性腸疾患における治療やモニタリングなどについて幅広く演題を募り、活発な議論を進めていきたい。

シンポジウム（公募）

「肝疾患診療の進歩」

司会 上嶋 一臣（近畿大学医学部 消化器内科）

井田 良幸（和歌山県立医科大学 第二内科）

肝疾患診療は近年目覚ましい進歩を遂げているが、まだまだ解決されていない課題も多い。C 型肝炎では慢性肝炎から非代償期肝硬変まで抗ウイルス療法の対象となったが、未治療例の拾い上げに課題が残されている。B 型肝炎においては核酸アナログ製剤による長期のウイルス制御が可能となったが、いかに HBs 抗原を陰性化させるかが課題である。非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）においては、糖尿病や脂質異常症等といった基礎疾患に対する新規治療薬の開発が進んでおり、これによる NAFLD の病態改善が期待されるとともに、肝線維化進展例の拾い上げが課題となっている。肝硬変に関してはウイルス性以外では根本的治療法がなく、合併症の治療による長期予後改善や QOL の改善が課題となっている。肝細胞癌診療では特に全身薬物療法が普及しているが、複数ある薬物の選択方法や、局所療法との組み合わせによる臨床効果の最大化および併用療法の確立をめざしたエビデンスづくりが課題である。このセッションでは肝疾患診療に関する診断・治療・拾い上げ等、各施設の現状・取り組み・問題点に関して幅広く議論したい。

シンポジウム（公募）

「消化管腫瘍診療の進歩」

司会 石原 立（大阪国際がんセンター 消化管内科）

永見 康明（大阪公立大学 消化器内科学）

消化管腫瘍に対する診療の進歩は目覚ましく、近年では AI をはじめとした様々な診断ツールの開発や治療法の発展により、治療の選択肢が広がっている。より低侵襲かつ効果的なロボット支援手術、内視鏡治療、放射線治療、化学療法などの進歩も日進月歩である。しかし、治療に伴う偶発症は少なからず存在し、同時に急速な高齢化に伴い、併存疾患の合併、抗血栓薬の内服、認知症、ADL の低下などから、従来の根治的治療をためらう状況も少なくなく、QOL も考慮した姑息的治療や経過観察も選択肢となることがある。本セッションでは消化管腫瘍に対する診断や治療の各施設での取り組みや問題点について発表していただき、今後の課題について議論したい。さらには高齢者に対する低侵襲治療やステントなどを含めた姑息的治療、経過観察などのその後の経過、QOL、予後などについての演題も含めて幅広く募集する。

パネルディスカッション（公募）

「がんゲノム医療の現状と課題」

司会 金井 雅史（京都大学大学院医学研究科 腫瘍薬物治療学講座）

蘆田 玲子（和歌山県立医科大学 第二内科）

ゲノムの包括的な解析技術の向上により、個々の患者の病態解明と治療法選択に関しゲノム情報からアプローチするゲノム医療が急速に進歩している。特にがん診療においては、2019年に「がん遺伝子パネル検査」が保険収載されて以来、それぞれの患者のゲノム情報に基づく個別化医療が実地臨床で可能となっているが、パネル検査に求められる組織検体採取の困難さや検査申し込みにおける手順の煩雑さなどの解決すべき課題も抱えている。MSI-high や TMB-H、*NTRK* 融合遺伝子陽性固形腫瘍に対しては臓器横断的な薬物療法が可能となっているほか、消化器がん領域では *KRAS*、*HER2*、*FGFR2* 融合遺伝子、*BRCA1/2* などの治療標的遺伝子が同定され、日常臨床に導入されている。リキッドバイオプシーに関しては偽陰性の問題や加齢に伴う Clonal hematopoiesis of indeterminate potential (CHIP) の混入などの難点はあるものの、パネル検査に必要な組織検体がない患者や、治療抵抗性や薬剤耐性の把握、術後再発の早期診断における臨床応用が大いに期待されている。本セッションでは、消化器がん診療におけるゲノム医療に対する新規取り組みや実臨床における有効性、問題点などを報告して頂き、今後の課題について有意義な討論を期待したい。